

## 哲学専修

教授 出口 康夫            近現代哲学・分析アジア哲学  
准教授 大塚 淳            科学哲学（生物学の哲学， 統計学の哲学）

〔主要著書・論文等〕

出口 (with G. Priest and J. Garfield) *Ways of Dialetheist : Contradiction in Buddhism (The Philosophy East & West, 2008)*. (共著)『知識と実在』世界思想社, 2008. (共編著)『応用哲学を学ぶ人のために』世界思想社, 2011. (共編著)『これが応用哲学だ!』大隅書店, 2012. (共著)『心と社会を科学する』東大出版会, 2012. (共編著)『デカルトをめぐる論戦』京大学術出版会, 2013. (共著) *Nothingness in Asian Philosophy*, Routledge, 2014. (共編著) *Moon Points Back*, Oxford UP, 2015. *What Can't be Said*, Oxford UP, 2021. (共編著)

大塚 *Using Causal Models to Integrate Proximate and Ultimate Causation (Biology and Philosophy, 2015)*, *Causal Foundations of Evolutionary Genetics (The British Journal for the Philosophy of Science, 2016)*, *Discovering Phenotypic Causal Structure from Nonexperimental Data (Journal of Evolutionary Biology, 2016)*, *The Causal Homology Concept, Philosophy of Science (2017)*, *The Role of Mathematics in Evolutionary Theory*, Cambridge UP. 『統計学を哲学する』, 名古屋大学出版会 (2020).

本専修は京大文学部創設以来の専修であり、西田幾多郎・田邊元を始めとする歴代スタッフの下で「京都学派」と呼ばれる哲学者を輩出してきた。その伝統を踏まえ、高等教育機関における哲学・思想系の教員(いわゆる専門の哲学研究者)を育てることを主眼においた教育がなされている。

他の多くの職種と同様、哲学の「職業訓練」でも、なによりも重要なのは基礎訓練である。哲学における基礎訓練とは、語学や論理学にじっくり取り組むことで、テキストの読解能力と論理的な思考能力を身につけることに他ならない。解説書の類ばかりを読んで、いたずらに哲学的物知りになるよりも、自分の語学力・論理力を地道に伸ばす努力を怠らないこと。これが、本専修の大学院への進学を希望する諸君におすすしたい勉強法である。なお、このような観点から、本専修の大学院生には「論理学」「ギリシア語」「ラテン語」のうちから一つを選んで必修することが課されている(既習者は除く)。

本専修の大学院には他学部・他大学の出身者も少なくなく、その割合は3分の1にのぼっている。その専攻の対象も広く、スピノザ・ヒューム・カント・西田・ウイトゲンシュタイン・ドゥルーズ・グッドマンといった近現代の古典的な哲学者から、言語哲学、論理学の哲学、生物学の哲学、認識論など、現代哲学のさまざまな分野におよんでいる。より具体的にどのような研究対象が選ばれているかについては、専修のホームページ上の各種の情報、特に「所属院生」のページを見て頂きたい。

近現代の代表的な思想家の思索のスタイルを批判的に摂取する一方で、数学・論理・科学・文学・芸術・宗教・政治・社会など、狭義の哲学以外のさまざまな事柄に関しても、他人の受け売り

ではない自前の知識を組織的に身につけること。また応用哲学的な問題にも積極的に関心を払いつつ、できるだけ早い時期に留学し、海外の第一線の研究状況に直接触れるとともに、実践的な語学力を養うこと。以上が本専修で推奨されている研究スタイルである。端的に言って、本専修では、古典的な問題意識を踏まえ、現代の最前線の哲学的な課題に挑むという姿勢が求められている。「オーセンティックかつアバンギャルド」。これが本専修のモットーなのである。

## 西洋哲学史専修

|      |     |        |                                    |
|------|-----|--------|------------------------------------|
| (古代) | 教授  | 中畑 正志  | プラトン, アリストテレスと後期古代哲学、基礎概念の歴史       |
|      | 准教授 | 早瀬 篤   | プラトン, アリストテレス                      |
| (中世) | 准教授 | 周藤 多紀  | ラテン教父哲学及び 13 世紀のスコラ哲学              |
| (近世) | 教授  | 大河内 泰樹 | ヘーゲルを中心とする近現代哲学 (2019 年年 10 月着任予定) |

〔主要著書・論文等〕 中畑『魂の変容——心的基礎概念の歴史的構成』岩波書店, 2011. 『はじめてのプラトン』講談社新書, 2021. 『アリストテレス全集』(共編) 岩波書店 2013~.

早瀬 「ソクラテスは諸事例にもとづいて定義を獲得すべきだと考えるか？」(『哲学研究』601号, 2017). 'Dialectic in the *Phaedrus*' *Phronesis* 62, 2016.

周藤 「徳と認識——トマス・アクィナスにおける親和性による認識」(『哲学研究』第 577 号, 2004). 「中世の言語哲学」(共著)(『西洋哲学史 II』講談社, 2011). *Boethius on Mind, Grammar and Logic: A Study of Boethius' Commentaries on Peri Hermeneias*, Brill, 2012.

大河内 *Ontologie und Reflexionsbestimmungen. Zur Genealogie der Wesenslogik Hegels*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2008 (単著)『個人的なことと政治的なこと—ジェンダーとアイデンティティの力学』彩流社, 2017 年 (共著)「多元的存在論の体系—ノン・スタンダード存在論としてのヘーゲル『エンチュクロペディ』」『思想』第 1137 号, 2019 年

本専修は、西洋哲学史における古代、中世、近世の三つの研究分野をふくんでおり、研究上および運営上でも相互に密接な関連を保っているが、ここでは便宜上、三つの分野に分けて記述する。

(古代) 本研究室が目指すのは、哲学という営みが形成・確立された現場から、古代哲学の特質を理解すると同時に、哲学の基礎的な問題をその根源にまで遡って平明に考察することである。そのためにはテキストの厳密な読解が前提となるので、古代ギリシア語に精通することが必須であり、またラテン語や近代西欧諸語も習得することが望ましい。初期ギリシアから後期ローマおよびその周辺にまでわたる広範な研究領域のなかで、研究対象と方法の選択は各自の自由にゆだねられており、最近では研究テーマは多様化している。ただしプラトンとアリストテレスの哲学を基本とした思考と文献学の訓練は重要であり、他のテーマを主題とする研究にとっても基礎となるだろう。また当研究室が運営の中心となって「古代哲学会」が組織され、機関誌『古代哲学研究(メトドス)』が年 1 回発行されており、院生も積極的に論文を投稿し、活発な議論の場となっている。

(中世) 本専修がカバーする研究領域は、古代末期のキリスト教教父時代からスコラ学をへてルネサンスに至るまでの哲学である。研究をすすめるためには何をおいても原典テキストの綿密な読解が要請されるので、この時期の学問言語であるラテン語に習熟していることが必須の条件となる。さらには、西洋中世哲学は古代ギリシア哲学との連関をもちつつ成立しているために、古典ギリシア語についても初歩的文法の知識は必要である。また、西洋中世哲学の根底的背景としてのキリスト教についても、基本的知識が要求される。以上のような歴史的知識と哲学的思考能力を基礎として、具体的な研究対象の選択は学生本人にまかされる。西洋中世哲学史の研究室には、その出身者を中心とした京大中世哲学研究会が組織されており、そこで研鑽を積むことができるとともに、年 1 回発行されている機関誌『中世哲学研究(VERITAS)』に研究を発表することができる。

(近世) 近世哲学史専修は、近世から現代にかけての西洋哲学を対象範囲とし、地理的にも言語的にも時期的にもまた哲学的傾向からいっても多様な哲学者・哲学説がそこには含まれている。志望学生に求められるのはそうした中から自分が関心を持った哲学者や哲学的問いに熱意をもって取り組むことである。どの哲学者や哲学思潮を研究対象とするとしても、事柄としての哲学と哲学的テキストとの両方に誠実に取り組むことが求められる。その際には、研究対象とするテキストが書かれたオリジナルの言語で、その研究対象に取り組むことが原則として求められる。研究室という場は、教員から指導を受ける場であると同時に学生同士が学びあい、切磋琢磨しあい、またサポートしあう場である。自らの思考と知識を、議論を通じて深化させていくのと同時に、仲間の主張には関心を開いて耳を傾け、相互の研究に貢献し合う姿勢が求められる。

## 日本哲学史専修

教授 上原 麻有子 西田哲学をはじめとする近代日本哲学身体論、翻訳学、女性哲学  
助教 パシュカ・ロマン 自然の哲学、環境倫理学、前近代日本哲学  
〔主要著書・論文等〕

上原 *Philosopher la traduction / Philosophizing Translation* (Nanzan Institute for Religion and Culture / Chisokudō Publication, 2017, 編著)； 「西田哲学の再解釈—行為的直観としての顔の表情」(『思想』No.1099、2015年)； 「西田哲学と一人称の哲学化」(『哲学研究』第六百號記念特集號、京都大学大学院文学研究科内 京都哲学界、2016年)； 「「名」と「実存」—九鬼周造の哲学を巡る一考察」(『日本哲学史研究』第14号、京都大学大学院文学研究科 日本哲学史研究室、2017年)

パシュカ *Asian Philosophical Texts: Exploring Hidden Sources* (Milan: Mimesis International, 2020, 共編), “The Self-with-others and environmental ethics” (*Environmental Ethics: Cross-cultural Explorations*, Verlag Karl Alber, 2020), “The Dialectic of Multiple Modernities in Japan” (*New Ideas in East Asian Studies*, 2017), “Volume on Shintō as Private Law: Andō Shōeki on Shintō - Fragments from *Shihō shinsho no maki*” (*Asiatische Studien - Études Asiatiques*, Volume 71, Issue 2, 2017, De Gruyter)

本専修では、いわゆる日本思想史ないし日本文化史と異なり、研究の力点を明治以降、今日までの日本の哲学の形成と発展の理解においている。つまり西洋の哲学に出会った明治以降の日本の哲学者が、そこで何を見出し、何を問題としたのか、さらに、西洋の哲学の受容と再解釈というプロセスの中で、いかなる独自の思索法を生みだしていったのか。このようなことが主要な研究対象となる。

「哲学の歴史」を考えるにあたり、「歴史」の面に重点をおいて、たとえば西田幾多郎や田辺元の思索の発展の跡をたどり、そこから問題を引き出していくということも可能であるし、あるいは「哲学」の面に重点をおいて、言葉や身体、自己、歴史というテーマを設定し、主として日本の哲学者の思索を手がかりとし、その問題を展開するということが可能である。またそのような考察を通して、日本の文化的・思想的創造の向かうべき方向を模索することも課題の一つである。

いずれにせよ、大切なのは、日本の哲学だけでなく、欧米の哲学についての知識も深め、広い視野で日本の哲学を探求することである。日本の多くの哲学は、欧米の哲学との対決を通して、またそれを踏み台として生みだされたのである。欧米の哲学を理解することなしに、日本哲学を研究することはできない。日本の哲学者の創造的な仕事を評価することも、そのような視点からはじめて可能になるのだ。

以上のようなことから、本専修の履修者には、西洋哲学に関する知識、欧語文献を読みこなす力が求められる。したがって、哲学・宗教学講座の他の専修の講義や演習にも積極的に参加してほしい。

一方で、日本の哲学は、日本、あるいは東洋の思想・文化的伝統においてこそ、はじめて形成され、独自性を発揮したと言える。したがって、日本と東洋の伝統、例えば仏教や儒教という視点か

ら、日本の哲学を探究することも必要であり、これは多様な形での研究テーマとなり得る。

以上説明してきたように、日本の哲学は、本質的に「比較哲学」として形成されたということが理解できるだろう。では、比較哲学研究の切り口をどこに見つけるのか。「日本」という視点にこだわりながら、独自の研究の方向を打ち出したいという意欲のある方には、是非、本専修で思索を深めてほしい。

本専修は、毎年、次のような教育・研究に関する活動を行っている。大学院生による国際学会での研究成果発表、日本哲学史フォーラム(年2回の公開講演会)の開催、『日本哲学史研究』(紀要)、および雑誌『日本の哲学』の刊行。

日本哲学史専修についてより詳しい情報を得たい方は、以下の HP をご覧ください。

[http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/japanese\\_philosophy/jp-top\\_page/](http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/japanese_philosophy/jp-top_page/)

## 倫理学専修

教授 水谷 雅彦 現代倫理学・応用倫理学（令和4年3月退職予定）  
准教授 児玉 聡 英米倫理思想史・応用倫理学  
助教 CAMPBELL, Michael 規範倫理学・メタ倫理学

〔主要著書・論文等〕 水谷『現象学と倫理学』（共著，慶應通信，1992），同『マイクロ・エシックス』（共編著，昭和堂，1993）同『批判理論』（共著，岩波書店，1994），同『情報倫理学—電子ネットワーク社会のエチカ』（共編著，ナカニシヤ出版，2000），同『情報倫理の構築』（共著，新世社，2003），同『情報の倫理学』（丸善，2003），同『応用倫理学講義3 情報』（岩波書店，2005），「The Internet and the Japanese Conception of Privacy」（coauthored with J. Moor & J. Dorsey, “Ethics and Information Technology Vol. 6-2”, *Kluwer Academic Publishers*, 2004）「コミュニケーションと倫理学」『哲学研究』第579, 580号，京都哲学会，2005  
児玉『功利と直観』（勁草書房，2010），Satoshi Kodama, 『実践・倫理学』（勁草書房，2020）  
"Bentham's Distinction between Law and Morality and Its Contemporary Significance.", *Revue d'études Benthamiennes*, (2019), 児玉聡「スペンサーの進化倫理学の検討」『哲学研究』603号（2018）

倫理学は「善い，悪い」「正しい，不正である」といった判断の基準を研究する学問である。遺伝子操作，環境破壊，データ捏造，ネット犯罪など，新聞をにぎわす社会問題は，本質的に倫理的な問題の応用編である。アクチュアルな問題のなかに原理的な大問題が潜んでいるというのが，現代という時代の特徴である。まず「世界という大きな書物」を読むこと，すなわち現実の問題を深く分析して，そこから原理的な問題を発掘してくることが，倫理学の最初の課題である。

しかし，このような課題に独善的でない仕方に取り組むためには，古今のすぐれた倫理思想を正しく理解することが役に立つ。たとえば「社会的な価値は全て個人の選好に還元可能か」とか，「行為はそれが他人に迷惑をかけない限り社会的に拘束すべきでないか」，「そのつどの人間主観に相対的でない自体的価値は存在するか」といった問題を過去の倫理学者たちがどのように考えてきたのかを，それぞれのテキストに即して読み解くトレーニングは必須である。

このためには外国語を最低2つはマスターするとともに，倫理思想史の基本的な知識を身につけておくことが求められる。また，コンピュータを情報検索の手段として使いこなす必要がある。カントやミルなどの西洋の主要な倫理思想家の著作の多くは，現在はテキスト・データベース化されている。インターネットを利用して内外の文献目録や最新の研究論文を入手することが，どのような研究にとっても必要になってきている。

大学院における研究と学部レベルの研究は異なる。学部段階では一つの具体的なテーマ，もしくは一人の主要な倫理思想家の主要なテキストの一つを確実に読み，そこで問題にされている基本的な問題を理解することがまず求められる。それに対して，大学院では複数のテキストを縦横に読みこなすとともに，同時代またはそれ以降の関連文献を十分に検討したうえで，自分の研究が現在までの研究史においてどのように位置づけられるのかをしっかりと自覚した論文を作成することが要求される。倫理学専修について，さらに詳細を知りたい方は，次の専修のサイトをご覧ください。

<http://www.ethics.bun.kyoto-u.ac.jp>

## 宗教学専修

教授 杉村 靖彦 宗教哲学（現代フランス哲学・京都学派の哲学）  
准教授 伊原木 大祐 宗教哲学（現象学・グノーシス主義の諸問題）

〔主要著書・論文等〕

杉村『ポール・リクールの思想—意味の探索』（創文社，1998），*Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps.*（共編著，Vrin，2013），「*Auto-éveil et témoignage - Philosopher autrement : l'Ecole de Kyoto en comparaison avec la philosophie française post-heideggerienne (I, II)*」（*Philosophie*, n.125, n.126, Minuit, 2015）。「〈自覚〉する身体—西田のメヌ・ド・ビラン評価から見えてくるもの」（『西田哲学会年報』第15号、2018），*Mécanique et mystique. Sur le quatrième chapitre des Deux Sources de la morale et de la religion de Bergson*—（共編著，OLMS, 2018），『渦動する象徴—田辺哲学のダイナミズム』（共編著，晃洋書房、2021）。  
伊原木『レヴィナス 犠牲の身体』（創文社，2010），「悪の問題を再考する——現代哲学と反神義論」（『宗教研究』第361号，2009），「異端表象の哲学的利用——宗教史から反歴史へ」（『宗教学論叢 26 越境する宗教史【下巻】』，リトン，2020）。

「宗教」の名の下で問題になりうる現象は実にさまざまであり，それに対する学問的なアプローチにも多種多様なものがあるが，当専修は，哲学研究を軸としてそこから宗教にまつわる諸問題へと接近していくという研究姿勢を基本としている。このような姿勢の前提にあるのは，宗教とは単に例外的な経験や特殊な信条・組織の問題ではなく，人間が人間として世界の内にあることの根源，自己の存在の根源が問われる場にほかならないという洞察である。そこでは，「宗教とは何か」という問いは，哲学の根本問題とおのずから触れ合うことになる。このように宗教と哲学とが切れ結ぶ地点に立ち，そこで求められる思索の行方を追究すること，その意味での「宗教哲学」が当専修の基本的な方向性である。この方向性は，西田幾多郎，波多野精一，西谷啓治，武内義範，上田閑照，長谷正當、氣多雅子という当専修の歴代の担当者が，多くの場合京都学派の哲学の展開との密接な連関の下で発展させてきたものである。

したがって，宗教史学，宗教心理学，宗教社会学，宗教人類学等々，およびそれらの方法論を駆使した記述的・実証的宗教学については，当専修のカリキュラムでは主題的に取り扱っていない。しかし，もちろんそうした分野に関する知識が不要だということではないし，学生諸君のそれぞれの関心に基づいた宗教現象・宗教思想へのアプローチを排除するものではない。実際，近年の宗教研究では，これまでの学問的区分や方法論の問い直しが強く迫られていることを考えると，当専修で行われているような研究との接点はますます増えてきているとも言えよう。

当専修の院生は，たいていの場合，欧米や日本の代表的な哲学者・宗教思想家から一人を選び，哲学研究という形でその思想を深く学んでいくというスタイルをとっている。宗教哲学という学問の性格上，研究は究極的には各人の実存的探求に根差したものにならざるをえないが，その探求を独善的なものにせず，思索としての深さと広さをもたせるためには，そのような行程を辿ることが不可欠だからである。そのために必要な語学力・テキスト読解力を身につけるべく，院生には厳しい訓練が課せられることになる。



ちなみに、ここ 10 年ほどの間に当専修の院生が専門としてきた思想家を列挙すると、カント、ヘーゲル、キェルケゴール、ニーチェ、ハイデガー、ベルクソン、レヴィナス、ヴェイユ、リクール、アンリ、デリダ、ジェイムズ、親鸞、西田、田辺、西谷、井筒等、多岐にわたっている。とくに、現在の担当教員の専門領域との関係もあって、現代の仏独哲学に関心を寄せる者が多いことが近年の目立った傾向である。いずれにせよ、現代哲学の先鋭的な問題提起に触れつつ、京都学派の哲学の歴史的蓄積をも視野に入れて、古来哲学と宗教の接点において問われてきた根本問題を深く追求することができるという点に、当専修の際立った独自性があると言えよう。留学生や研究者も定期的に在籍し、海外の研究者や研究機関と共同での催しも盛んである。

なお、発足時から当専修と縁が深く、当専修の出身者が多数関わっている学会として、宗教哲学会がある。その機関誌『宗教哲学研究』(年 1 回刊行)は現在第 38 号を数え、日本の宗教哲学研究の一つの拠点となっている。

## キリスト教学専修

准教授 津田 謙治 古代・中世キリスト教思想, 教父学, 教理史, 異端研究

〔主要著書・論文等〕 津田『マルキオン思想の多元論的構造』一麦出版社, 2013. 「オリゲネスにおける神的場所概念の考察 — 『祈祷』の議論を主軸として」(『基督教学研究』38号, 2019). 「初期キリスト教教父思想におけるオイコノミア概念 — 否定神学、悪の問題を手掛かりとして」(『宗教研究』389号, 2017). 「護教家教父思想における神の場所の問題」(『宗教哲学研究』31号, 2014).

キリスト教学専修は大正11年(1922)に創設されたが、特定の信仰や教義に基づく神学部とは異なり、キリスト教を純粹に学問的な見地から研究することを目的とする。この点で、本専修はキリスト教思想を研究対象とする諸大学の関連講座の中でも特徴的な位置を占めている。研究と教育はキリスト教の歴史と思想の全分野にわたって行われているが、その中でも伝統的には次の分野に力点が置かれている。

1. 旧約・新約学
2. キリスト教思想史, 特に古代教父, 宗教改革, 近現代キリスト教思想
3. キリスト教思想の体系的・宗教哲学的研究

こうした諸分野に関して高度な学問的な研究を行うためには、文献テキストの文献学的あるいは歴史学的研究を基礎にした、キリスト教思想の厳密な理解が要求される。したがって、本専修志望者には、原典研究を行うに必要なギリシア語、ラテン語、ヘブライ語などの古典語の習得と、近代語(英語, ドイツ語, フランス語など)についての習熟が期待される。また、キリスト教の歴史や思想と深い関わりをもつ思想史(教会史や教理史の他に、哲学史や宗教史なども含む)についての知識も大切である。しかし、何よりも、志望者には、キリスト教を学問的に研究したいという意欲と情熱、そして基礎的な語学や知識の学習に要する持続力が望まれる。

授業は、本専修スタッフによる講義と演習のほか、学外からの非常勤講師によって、上記の諸分野の主要領域をカバーするように行われ、さらに他専修との共通の授業も含めることによって、キリスト教思想についての十分な学習が可能になるように配慮されている。津田准教授は、古代から中世にかけてのキリスト教思想(教父学や教理史、特に護教家、初期ラテン教父、アレクサンドリア学派など)、あるいは近代ドイツのキリスト教思想(自由主義神学や宗教哲学、特にハルナックや宗教史学派など)を中心に教育・研究活動を行っている。授業がこうした専門領域を中心に広範な内容に及ぶことは言うまでもない。

キリスト教学専修では、授業のほかに、他専修や他大学の研究者・院生を交えた様々な研究会や読者会、本専修出身者を中心とした京都大学基督教学会(学会誌『基督教学研究』)を通して、学生にその視野を広める機会を提供している。また英米やドイツ、そして韓国や中国の研究者との学術交流を行うなど、キリスト教学研究を広い国際的視野のもとで進めるよう努めている。これは、本専修が多くの海外からの留学生を受け入れている点にも表れている。

本専修についてのより詳細な事柄については次のサイトを参照されたい。

[http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christian\\_studies/cs-top\\_page/](http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christian_studies/cs-top_page/)

## 美学美術史学専修

### 美学芸術

准教授 杉山 卓史 美学・感性論

### 美術史学

教授 根立 研介 日本美術史（特に仏教美術史）（令和4年3月退職予定）

教授 平川 佳世 西洋美術史

准教授 筒井 忠仁 日本美術史（特に近世絵画史）

〔主要著書・論文等〕 杉山「Empfindnis 概念小史」（『哲学研究』第605号、2020年）。

*Computational Aesthetics*, Springer, 2019（共著）。同「「われ感ず、ゆえにわれ在り」のヘルダーにおける成立」（『美学』246, 2015）。

根立『日本中世の仏師と社会』（塙書房、2006）。同『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記1～16』（共編、中央公論美術出版、2003～10, 2013～20）。

平川, *The Pictorialization of Dürer's Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Peter Lang, 2009。同「スプラングル作《最後の審判》—銅板油彩画の宗教的機能に関する試論」（『京都美術史学』1, 2020）。

筒井「キトラ古墳壁画」『特別展 キトラ古墳壁画』図録（東京国立博物館、2014年）。同「又兵衛絵巻の伝来と享受」『岩佐又兵衛展』図録（福井県立美術館、2016年）

本専修は、〈美学芸術学〉、〈美術史学〉、〈比較芸術史学〉の三分野からなり、上記の専任の教員のほか、非常勤講師の協力を得て多彩なカリキュラムを提供している。

〈美学芸術学〉では、美、崇高、滑稽、醜等の美的体験の特質や、芸術の成り立ち、芸術と社会の関係、芸術史の方法論等を理論的に研究する。この分野の研究者は、最終的には自分の言葉で美と芸術について語る事が求められるが、そのためには古典に通じる必要があり、また、新しい思想にも心を開き、それら諸々の理論に対して批判的な検討を加えるように努めなければならない。

〈美術史学〉では、日本、東洋、および西洋の美術作品を、それが制作され、受容された歴史的な文脈に即して研究する。したがって、まず第一に実作品および古文書資料の調査に基づいた実証的な研究が重視されているが、併せて新しい研究書の精読も不可欠である。それゆえ、この分野の大学院生には、美術作品を見る繊細な眼を養うとともに、文献の正確な読解力を身につけることが要求される。

〈比較芸術史学〉では、地域、時代およびジャンルを越えた広い視野からの芸術の比較研究を行う。ここでは、日本における異文化理解の仕方、逆に日本文化の異文化への影響、さらには異なる文化間での芸術の交流の実態と可能性などについて、歴史実証的、あるいは理論的に考察することを目指している。この分野の大学院生にとっても文献研究が重要であり、研究対象に応じた外国語、漢文、古文の習得が必要なことは言うまでもない。

本専修は、以上の三分野からなり、大学院生は、主としてそのいずれの分野の研究に取り組むことになる。その一方で、各自の専門分野に閉じこもるのではなく、芸術全般に関する総合的な知識と視野を持つことも要求される。機会あるごとに博物館、美術館を訪ね、また演劇、文芸、音楽、

映画などに接して各自の芸術体験を豊かにしておくことが望ましい。

本専修を志望する学生は、何よりもまず芸術に対して深い関心を持ち、芸術を楽しむ者であってほしい。また、同時に自らの問題意識に基づいて、一人で粘り強く研究を進めることができねばならない。大学院生の研究発表の場として演習が設けられており、そこでは大学院生が教員とともに積極的に発言するよう期待されている。なお、本専修で行われている具体的な研究内容については、『研究紀要』、『京都美学美術史学』、『京都美術史学』，ならびにホームページを参照してもらいたい。

[http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics\\_and\\_art\\_history/aah-top\\_page/](http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-top_page/)



当研究室保管作品「たなばた」上巻

冊子装、縦 24.0 cm、横 18.3 cm、製作時期 17 世紀。

室町時代後期から江戸時代初め頃に作られた日本の短編物語の代表的なものの一つ。